

## 床屋と僕

向井 康晴（こうせい）

東京都江東区東雲。高層ビルが並ぶ街で育った一人っ子の僕は、七歳まで従兄弟すらいなかった。親は「これからは血縁関係に頼る時代ではない、他人と幸せな人生を送ってほしい」と思い、小さな頃から様々なことを僕に体験させてくれた。ボーイスカウトのようなクラブやキャンプに飽きるほどに参加させられた。

小学生になって間もない頃、先程の教育の一環として一人で床屋に行くことになった。これまで親といていた場所に一人で向かうのはおかしいことではない、と思って床屋へ向かった。そして親に言われ必死に覚えたセリフ、「うなじスッキリで」を店員に言うと純粋に驚かれ、笑われた。初めて一人でやってきて、さらに発した一言が「うなじスッキリで」だった小学一年生。それは驚くに決まっている。今でもあの時の恥ずかしさを覚えている。今ではいい思い出だな。

僕が一人で行った床屋は大人気店となり、休日は二日前に予約をしないといけないほどになった。大きな通りから一本入った渋い道、古い定食屋の隣にある、その名も「ヘアーサロンクドウ」。昔ながらの床屋を綺麗にしたかのような店内は手前の待機スペースの椅子や漫画、新聞たては幼い僕にも古いと分かった。小一の頃、漢字が読めなかった僕はゴルゴという本が大量においてあることしかわからなかったが、目に入るのは雑誌やそのほか大人向けの漫画だけ。子供が行くような場所ではなかったのだろう。今では子供向けの本なども並べられている。来る子供も増えたんだな、結構変わったな。

もともと父親が通っていたクドウさんには三、四歳の頃に初めて行った。ふくよかな優しいお父さんに切ってもらった。当時の椅子は固く、座り心地は良くなかった。ただ産毛も生えていないはずの僕の顔を剃ってくれた時、気持ちいいと感じた。今では椅子も新しく座り心地の良いものになってしまった。今思えばあの頃もよかったな。今では座り心地が良すぎて眠くなってしまう。

そんな僕の床屋生活は様々なことがあった。初めて行った時には、父親が他人と話してい

るところを見て驚いた。店員さんと仲が良さそうに笑いながら敬語で話している。見たことのない光景に驚いたと同時に、何か大人の世界を見られたような気がした。今思えば大人の世界とは違ったのかなとも思うが、大人の雰囲気だけでも感じられたような気がした。それからというもの、会ったことのない大人の人には敬語で話すようになり、敬語の難しさというものを他の人よりも早く感じるようになった。また一人で行くようになってからは毎回同じ店員さんに切ってもらい、話も弾むようになった。もちろん敬語でね。幼かった頃は自分から学校のプールの話や友達と遊びに行った時の話をしたり、自分の悩みを相談したり、それに対して店員さんの体験談を聞かせてもらったりもした。店員さんに教えてもらったことが役に立ったかと言われると疑問符がつく。だが優しさに感動し、いつかはこんな大人になりたいと思う人物像の中にその店員さんが加わった。いざという時の優しさがとても格好良く思えたのだ。この時も自分が少し大人になれた感覚があった。

しかし、そんなクドウさんにも行けなくなる日々が始まってしまった。受験に向けた勉強漬けの日々で、他の床屋へ行かざるを得なくなってしまったのである。自分が行きたい場所へ行くための勉強ではあったものの、他の床屋へ行くのは違和感しかなかった。しかし以前学んだような話し方などで、行き先の床屋でもすごく良くしてもらった。しかし、やっぱりクドウがいいな。それだけだった。

受験が終わると久しぶりのクドウさんへ。店員さんも変わっており、以前とはだいぶ雰囲気も変わっていたが、あのアットホームな感じは全く変わっていなかった。新しい店員さんに切ってもらい、運動をしていなかったことで太ってしまった話、それまでは野球やテニスをしていた話などをし、テニスをやっていた店員さんとの会話も弾んだ。ああ、帰ってきたんだな。どこか気持ちがよかった。

僕は今年の春休み、神奈川にある有名なラーメン屋へ行った。子供や、学生に見える若者もたくさんいる中で多分唯一、店主の方に話しかけてもらえた。積極的に関わることで身近な人との関わりかたも変わり、知らない人に話しかけてもらえるようにもなった。それは紛れもなく、幼い頃から様々なことを家族以外の人と関わってやってきたことが功を奏した結果だろう。本当に良かったなと思う。これからもさらに様々な人と関わって、話して、話しかけてもらって楽しく生きていきたいと思う。クドウさん、ありがとう。これからもよろしくお願いします。

(東京都江東区)

【無断転載を禁ず】